

愛知学院大学人間文化研究所報

日記の行方

——日記が生きる土壌——

松園 齊

古代・中世の日記を史料として研究された方なら、すぐ気づくことであるが、日記は、記し始めてから筆を擱くまでのすべての部分が今日まで残っているというものは恐らく皆無であり、途中のかなりの部分が失われてしまっているものがほとんどで、更に多くは、残っている期間より失われてしまっている期間の方が多いものの方が普通のようなものである。

日記を記している本人（古記録学では記主とよぶ）が生存中にも、自身の日記が火災などの不慮の出来事で失われてしまうことがままあった。鎌倉時代の公家日野流藤原氏の兼仲は、文永一一（一二七四）年六月に自宅が火災に遭い、具注曆（この時代のカレンダー）に記していた自身の日記のその年の分は手元にあつて持ち出すことができたが、それ以前の分はすべて焼失してしまつたという（『勘仲記』文永一一年六月四日条）。また、室町時代の公家甘露寺親長も、彼が四六歳の時に応仁の乱に遭遇し、疎開先の鞍馬寺で、先祖の日記や自身の日記のその年と前の年の分の日記を焼失してし

まつたことを日記に書き残している（『親長卿記』文明二年九月二日条）。

日記を使って歴史を研究する者にとつての理想は、その記主の自筆の日記が、当時記したままの状態に残されていることであるが、それは希有のことであり、日記が多く残され始める平安時代の中期から終わりの頃までを見渡しても、有名な藤原道長の『御堂関白記』を除いて、ある程度まとまつた分量で残っているものはほとんどないといつても過言ではない。

それでも平安時代の日記は結構多く残されているのであるが、当然ほとんどが書写された形、それも恐らく度々書写を繰り返して残つたものであり、場合によってはすでに写本といえるほどの分量を保つていないものも多く存在する。日記には、当時の貴族たちが儀式や政務を運営するために必要な情報を多く含んでおり、それを得るために、個人の日記が一つまるごとの状態から、一日分だけの記事に至るまで、貴族たちの中で書写が繰り返された結果である。これは、現在の私たちが研究に必要な書物や論文のコピーをさまざまに入手し所持し、さらに論文を書くにあたって、それらの一部を引用するように、当時の貴族たちも自身の

日記に先例として参考にした日記の記事を書き留めているのである。そしてそこに引用された日記の本体が失われた後も、他の日記に引用された部分だけ（場合によっては引用された日記の名前だけ）が後世に伝わるという場合も多いのである。

何事にも先例を重視する当時の朝廷・貴族社会においては、古き良き時代の儀式のやり方や作法に価値をおき、それらを知るために先人の日記を大変重視し、かつよく読んで公事の現場で利用を試みていた。そのため、延喜・天曆の治とよばれる貴族たちにとって古き理想の時代のことが記された醍醐天皇や村上天皇の日記、それに『李部王記』とよばれる当時儀式に精通していた醍醐天皇の皇子重明親王の日記、それに摂関政治が確立された一条天皇や道長の時代のそういつた情報を満載した藤原実資の『小右記』や同行成の『権記』などは特に重視され、それらを伝来していた子孫の手を離れると多くの貴族たちが書写して、みずから活動の資としたのである。平安時代の終わりにかけて、それらは活発に写され、貴族社会の中にさまざまな形として伝播していったのである。今日私たちが逸文と呼んでいる日記の

断片的な記事のほとんどは、そのような彼らの活動の結果生じたものであり、まとまつた歴史像を伝えてくれるものが多くないので、以前は歴史研究というレベルでは価値をおかれていなかったが、その本体そのものは減んでしまつていても、その逸文を生じさせたシステムに視点を向けると、当時の貴族たちの活動の実態が見えてくるのであり、それら逸文の収集・研究の重要性は今日再認識され、研究分野として定着していると言つてよい。

日記は、ある意味、その肉體を失つてパーツ、さらに断片となつても、その生命力を維持していると考えられるのである（注）。

注 この点については、松園「日記の生命力」『REKIHAKU』3号、二〇二二参照。

これはあくまで歴史学における史料的な価値からみたイメージなのであるが、例えばそのような日記がまだ生産されていた当時の社会において、このような本体から離れた日記の断片たちはどのような機能を果たしていたのだろうか。

十二世紀、摂関家の藤原忠実の談話を書き留めたという説話集『中外抄』には、小野宮殿とよばれた摂政藤原実頼が薨じた際、京の人々がその邸宅の前で嘆き悲しんだという話を「一条摂政記」に見えるという形で載せている（久安六年七月十七日条）。これは「一条摂政」、つまり天禄元（九七〇）年にこの実頼に替わつて摂政となつた藤原伊尹の日記と考えられるが、この日記は、その子孫である行

成の日記『権記』にも確認されず、後代の貴族社会にもほとんど引勘などでも使われていない日記である。この『中外抄』の統編的な存在と考えられる『富家語』にも忠実の談話としてこの話が出てくるが（応保元年）、そこでは「一条殿雅信公左大臣記」とあり、宇多源氏の源雅信の日記とされている。伝来の過程での誤写の可能性もあるが、すでに談話が筆録された際、忠実の記憶も曖昧になっていた可能性もある。伊尹も雅信も実頼が薨じた時、現任の公卿であり、どちらの日記に書き留められていてもおかしくないが、それらは早くに失われてしまったらしく、後代の貴族の日記にもまったく引勘されていない。忠実がどのようにしてこの話を入手したのかは不明であるが、伊尹と同じ九条殿師輔の子孫として（伊尹は師輔の長子、忠実は三男の兼家の子孫）、日記そのものではなくとも一門の話題としてどこかで聞き知っていたのであろう。ただ、テキストを見る限り、日記そのものではなく忠実の手元になく、話題の典拠を確認することは忠実本人や周囲の者たちにも不可能になっていたと考えられる。

この実頼の説話は、一三世紀前半の説話集『古事談』にも載せられており、こちらは編者源顕兼が自ら「一条撰政記」を参照して載せた訳ではなく、『中外抄』の説話をそのまま転載したものと考えられる。さらに同じ一三世紀に成立した『源氏物語』の注釈書である『紫明抄』にも「一条殿下記」という日記が別な話題で引用されており、この記名に見える「殿下」は撰政を意味するものであれば、『一条撰政記』として伝来したものの逸文と考えられる。その逸文には前述の『季部王記』が引用されており、ある段階まで日記としての実体があったと思われるが、やがて日記本体から漏れ落ちて、公事の世界とは別な世界（物語の世界）に流れ着いたと思われる。

現代の私たちの感覚からすると、前述の実頼の説話にしても、説話集再録されるにあたって「一条撰政記」に見えようというような典拠の提示は不要なように思われるし、すでに『古事談』のような十三世紀段階の説話集の編者たちには、話が「一条撰政記」に本当に載せられているかを確かめる術はなかったようにも思えるから尚更不思議に感じる。

このようにある話題の典拠として、その世界の中だけに伝わった日記の記事は結構あったように思われるが、本体から切り離された破片であるからこそ、日記の名が添えられていることによつて、ある種の価値が保持されることになったのかもしれない。

そこで思い当たるのは、以前調べたことがある「日記の家」という問題において、古代・中世においてこの用語が史料的に確認される一二世紀から一四世紀の間において、前半期には『中右記』や先程触れた『中外抄』など貴族社会の中核部の人々によつて使用されていたのに対し、後半の一三世紀に入ると『宝物集』や『雑談集』などどちらかといえばその周辺部の人々の作品の中に見えていることである（松園『日記の家』吉川弘文館、

一九九七）。

例えば、『宝物集』では、長徳元（九九五）年に疫病で上級貴族まで多くの人々が亡くなったという話題について、「昔もかく臣下一度にうせ給へる事なし」とぞ日記の家の人もたまひける」というように、過去の歴史をよく知っている人々として表現されており、それは彼らが当時過去の正確な事実を知るために必要な日記を多く所蔵していると考えられていたことに由来するものであろう。

中世の説話編者たちが殊更に収集した説話の典拠として日記名を掲げるのは、その説話を作り話ではないことを強調するものであったと考えられるが、それは彼らがイメージする「日記の家」という存在に支えられていたようである。公事の現場で日記を作成したり利用したりする立場になかった、つまり「日記の家」ではなかった彼らにとつて、実際には「一条撰政記」が存在するかどうかは調べようもなかったであろうが、「たぶん日記の家にあるはずだ」くらいの認識で十分だったのであろう。

貴族社会の中核部では、いまだ多数の「日記の家」が存在し、それを自認する人びとが、公事の現場でその「家」に秘蔵する日記の質や量を競い合っていた。そこには、あの蓮華王院の宝蔵に世にも珍しい宝物が保管されていると当時の人々が信じていたのと同様に、自分たちが知らない貴重な日記が保管され、彼らが収集した説話の典拠とされる日記もそこにあるはずと認識していたのではないだろうか。そのような意識は、説話作家

に限らず、歴史書を編纂する人びとや、前述の『源氏物語』の注釈を著した人々、それに歌論書、楽書など貴族社会の周辺部に所属する諸道の人々、さらに仏教界で聖教類の作成に関わる僧たちにも共通して存在した認識なのではないかと考えている。

本来の価値が保たれていた世界とは異なった世界に流れ出した日記の断片も、特定の話題と結びついて、あちらこちらに散らばりながらも自分の居場所を見つけ生き続けていたといえよう。それは、本体が朽ちてしまっても生命力を維持できる土台が存在していたからこそである。中世前期の文化的な環境を考える際に見落とすことができない要素の一つではないかと考えている。

後記 本来ならば当研究所のプロジェクト研究の一つである「日本人の日記・紀行・帳簿についての歴史的研究」（松園斉・中川すがね・後藤致人）の中間報告を掲載すべきであるが、昨年度については新型コロナウイルスの流行によつて、研究会活動が実質的にストップしてしまつたため、その代わりの成果の一つとして掲載するものである。



「不抵抗」中国への日本の侵略
一九三二—一九三六年
—「日中十五年戦争論」に対す
る異論—

菊池 一隆

本小論は、愛知学院大学に赴任以来十七年間、東洋史特講で春学期に講義してきたものの総決算である。一九三二年の万宝山事件・満洲事変から西安事変、三七年七月日中全面戦争が勃発する盧溝橋事件以前は日本の一方的侵略で、中国は国家主体として、いかに戦わず、戦争状態になつていなかつたかを論じる。すなわち、南京国民政府の行動原理は、蒋介石の「安内攘外」論、「対日絶対不抵抗」政策に基づいていた。いわば強国日本とすぐさま戦争はできず、中国共産党（以下、中共）を打倒し、国家を統一、戦争準備をした後、日本と戦い、中国から駆逐できるとするものであった。この論理は三四年に正式に公表されるが、すでに満洲事変当時から貫徹されていた。いわば「中国抗日八年戦争論」を提示し、「日中十五年戦争論」、「日中戦争論」（満洲事変から盧溝橋事件間に締結された塘沽停戦協定で戦争は断絶するとの説）、「太平洋戦争論」、「大東亜戦争論」等々を紹介しながら、異論を提起するものである。こうして、学生が多角的視点から実証的に考察、分析する能力を養成しようとした。もちろん学生が考察の上、どの説をとるかは自由である。

一
私が「中国抗日八年抗戦論」を主張する理由は以下の通り。

第一に、(1)万宝山事件は元来、「小規模な水争い事件」であつたが、関東軍が「中国人による朝鮮人暴行事件」として拡大発表し、朝鮮事件が誘発されたことが強調されてきた。関東軍による偶発的事件の利用にも見えるが、万宝山事件は単なる小事件といえない。なぜか。万宝山が、間島地方の政治形態を満洲全体に普遍化させる日本の侵略戦略に基づく布石という意味だけではない。「満洲国」の首都を、張学良の基盤の奉天（瀋陽）から引き離し、万宝山近くの長春を「新京」としたことは単なる偶然とは考えられない。そう見てくると、万宝山での大規模農場・水田の創出は長春への食糧供給に狙いがあり、かつ中国側の軍事力、治安能力、抵抗力を測ることができた。連動する朝鮮事件では、日本は植民地体制への朝鮮人の不満を、より弱い立場の華僑に向けさせ、ガス抜きをした。

(2)他方、中国側は万宝山事件と朝鮮事件を切り離し、あくまでも万宝山事件を通常の地方レベルの事件として決着を目指した。そして、蒋介石・南京国民政府はあくまでも「安内攘外」政策で対処しようとした。そして、国民政府軍による中共ソビエト区への全国的な包囲攻撃を優先したのである。張学良は排日運動がある程度容認しながらも、結局のところ蒋介石の「対日絶対不抵抗」の命令に則つて「安内攘外」政策を貫徹することに

なる。
(3)南京国民政府は万宝山・朝鮮事件を外交交渉により日本の責任を追求しようとしている最中に関東軍によつて満洲事変が発動されたのである。いわば日本の連続侵略であり、万宝山・朝鮮事件はかたまりのもので、単に延長線上に満洲事変が歴史的に位置すわけではない。
第二に、(1)満洲事変発動の日本側の背景は世界恐慌、続く農業恐慌である。日本政府は国民の不満を海外、特に満洲（中国東北部）に向けることで解消しようとした。日本の農村破産に対処するため、かつ満洲移民という形で仕事を与え、同時に、対ソ戦線準備という任務も課した。いわば満洲移民は緻密な計画も現地調査もなく、日本の国策による「棄民」ともいへべき質を有していた。他方、侵略の対象とされた後進資本主義国の中国はさらに悲惨な状況を呈しており、長江流域の大水害、黄河流域の大旱魃に襲われていた。そこで、上海ブルジョアジーを始め、自然災害の影響を受けていない満洲に打開策を求めようとしていたのである。
(2)第一次上海事変も日本の謀略から開始された。日本は上海を叩くことで海外の目を満洲からそらせ、「満洲国」建国を容易にしようとした。中国の最大貿易港、軽工業の中心大都市で、抗日の拠点でもある上海に打撃を加え、同時に列強の国民政府支援に楔を打ち込むことを狙つた。これに対して、三二年一月（五月）国民政府軍所属の十九路軍が民衆の支援を受け、日本軍と粘り強く戦つた。

だが、蒋介石は軍紀違反として十九路軍の対日抵抗を阻止しようとしさえした。もちろん蔣は日本の上海侵略に怒りを抱いていた。蔣は第一次上海事変や長城抗戦で、日本は強くないことを立証したとし、全国規模で本格的な準備をすれば、日本の侵略を阻止できると強調している。
(3)国際連盟が「日本の行動不承認」を決議しながらも脆弱で、日本の満洲侵略を阻止できなかった。三三年三月日本は国際連盟脱退後、熱河侵攻をおこなつた。その目的は「満洲国」の支配区を拡大、確定するという既定方針に則つたものであった。日本は蔣の不抵抗政策により狙い通り難なくそれに成功した。その結果、日本は「支那弱し」を実感し、増長していった。
(4)ただし満洲各地の旧東北軍将軍や民衆の一部は自然発生的に対日抵抗を開始した。とはいえ、東北義勇軍の戦いは「対日絶対不抵抗」を意識した受動的なものであり、日本軍の攻勢に遭うと撤退し、あるいはソ連領に逃げ込み、再び中国に戻り、日本軍と再び戦うという形態をとつた。こうした点から東北義勇軍のレジスタンスは重要な歴史的意義を有するものとはいへ、戦争の一環として見なすことは不可能であろう。
第三に、(1)三四年国民党第四回五中全会で「安内攘外」政策が明言された。これは、国際連盟への過信、中共地区への包囲攻撃、及び抗日救国運動弾圧となつて示された。だが、この政策は国民の理解を得られず、各方面に激しい反対を惹起した。それを押さえ込むために蔣介

石・南京国民政府は、特務を強化、また地方武装と保甲制を実施し、各戸管理を強化した。さらに思想統制のため、儒教を核とする新生活運動を推進したのである。

(2)前述の如く蒋介石・南京国民政府は日本の侵略を是認していたわけではない。弱体な中国が強国日本に対する抗戦準備のため、経済建設、制度改革を急ピッチで推し進めたのである。さらに蔣は中国西南部の四川を日本と最終決着をつける抗戦基盤と見なし、視察している。

興味深いことは、華北財閥を基盤とする親日派の政学派が民族派、抗日派へと大転換を見せ、新たな奥地抗日経済形成のヘゲモニーを握ることになる。この点は極めて重要である。なぜなら日本は華北侵略によって、結果的に自らの支持基盤を切り崩しながら侵略を推し進めたことを意味する。

(3)都市民衆による抗日反蔣運動が激化し、蒋介石の中共消滅優先・対日不抵抗政策に反発した。中国民衆は日本品 boycott を武器に日本に直接打撃を加えようとした。注目されるのは、日本の経済侵略で打撃を受けていた民族資本家が急先鋒となり、抗日運動を指導したことである。宋慶齡ら第三勢力系の民権保障同盟は、人権侵害を非難、抗日支援を訴え活動した。それは世界的広がりをもち、團結禦侮自救会結成と結びつき、かつ胡漢民ら国民党大幹部らも巻き込み、後の抗日民族統一戦線に繋がる重要な役割を果たした。

(4)福建人民革命政府が十九路軍將兵と

第三勢力諸党派によって樹立され、「反日反蔣」を標榜し、日本を含む各方面に衝撃を与えた。反帝反封建のブルジョア民主主義の性質を有す政権で民主的諸権利を主張した。蒋介石は同政権に対して攻撃、瓦解策動を実施し、他方、未成熟な中共も「中間階級主要打撃論」により「危険な改良主義」の政権と見なし相互支援を履行せず見捨てた。

(5)蒋介石・南京国民政府は「安内」のため、各地に割拠する中共ソビエト区に対する包圍攻撃をおこない、その消滅を急いだ。他方、中共も国民政府軍に対する防衛で精一杯な上、思想、武力、戦術、及び第三勢力評価等々で教条主義による脆弱さを有していた。中共も満洲の一部ゲリラを除いて実質的に日本と戦える状況になく、消滅の危険性すらあったのである。中共は敗走を「長征」（日本征伐の遠征）と称し、「北上抗日」を標榜した。劉志丹が率いる弱小だが、強靱な陝北ソビエトが生き残っており、そこに逃げ込み、再起を可能にしたのである。

第四に、(1)一九三三年五月の塘沽停戦協定から三七年七月は、前述した如く、①日中戦争が一旦断絶するとし、非連続性を強調する「日中戦争論」がある。これに対して②「日中十五年戦争論」では「二連の侵略戦争」とし、この時期も戦争状態とする。実際は、両説と異なり、③戦争状態ではないが、華北分離工作、天羽声明、冀東防共自治政府の設立等々、協調外交とされる「広田三原則」を含み日本の「一貫した侵略行為」が続いていた。

(4)福建人民革命政府が十九路軍將兵と

(2)領域拡大、経済権益の増大を謀る日本の露骨な各種侵略に対して学生、第三勢力、民衆の怒りは増大していった。この段階では、中共の主張は、あくまでも「反蔣抗日」であった。中共系学生がヘゲモニーを握った一二・九運動は起爆剤としての役割を果たした。これは非暴力形態で市民との連合を可能にした。各種救国会で連合する趨勢にあり、全救連を創出した。なお世界華僑も欧州（パリ）と東南アジア（シンガポール）を核として展開し、「国共内戦反対」と「抗日」を訴え、海外から国民政府を突き上げた。

(3)両広事変が勃発し、反蔣で名高い両広（広東・広西）軍閥が「北上抗日」、日本から満洲などの「失地回復」を主張した。ここに十九路軍將領はもちろん、第三勢力が結集したのである。もし上述の主張に同意すれば、蒋介石・国民政府に服従するというものであった。だが、蔣は同意せず、失敗に終わるが、全国の抗日救国運動を鼓舞し、同時に中共の政策を「反蔣抗日」から「逼蔣抗日」へと転換させる契機となった。のみならず、成都事件、北海事件等々、中国民衆による日本人殺害事件も多発した。

(4)閩東軍の支援の下、徳王の蒙古傀儡軍による綏遠攻撃は、日本の狙いが満洲侵略後、西北への直接侵略であるとの危機感を蒋介石に抱かせた。これ以降、外交部長張群の対日言説も厳しいものになった。他方で国民政府は第三勢力の「抗日七君子」を弾圧、投獄などを継続していたが、抗日戦争へと突き進む大きな契機となった。

(4)閩東軍の支援の下、徳王の蒙古傀儡

(5)蒋介石・国民政府は「安内攘外」政策に固執していたが、消滅しない強靱な中共に手こずった上、その間も侵略行為を強行し続ける日本に対して戦争を開始することに次第に傾斜していった。一九三六年二月西安事変は勃発した。陝西省には、すでに劉志丹・陝西共産党と張学良・東北軍、および楊虎城・西北軍という「西北小連合」という基盤があった上に、中共・東北軍・西北軍の「西北大連合」が形成されていた。その渦中に蒋介石は飛び込んだのである。日本もソ連もその本質を見抜けず、双方のマスコミは中共が主体となって西安事件を起こしたとする誤報を流し続けた。かくして、三七年九月には、蒋介石を頂点とする第二次国共合作、そして第三勢力諸党派も包括される抗日民族統一戦線が結成され、「全民抗戦」が戦われることになる。

要するに、この時期の特徴は以下のよう

に言える。すなわち、日本の侵略下で国民党は中共絶滅を期して対日妥協をしながらも抗日戦争の準備をしていた。また、中共は国民政府軍を主要敵とせざるを得ず、実質の意味で抗日戦争を展開できなかつた。それに対して、第三勢力や学生が各種方式で抗日運動、もしくは抗日諸願運動を展開していた。だが、蒋介石を含めて各勢力は近い将来か現在かを別にすれば、日本との戦争はやむを得ないとの認識に立っていたといえよう。この際、第三勢力が国民党と中共の間に立ち、媒介となり、第二次国共合作・抗日民族統一戦線の樹立を可能にする流れを創っていったのである。かくして、日本

創っていったのである。かくして、日本

は全面戦争後、敗北するしか抜けきれない泥沼戦争に突き進んでいくことになる。

【参考文献】

- ①拙稿「万宝山・朝鮮事件の実態と構造―日本植民地下、朝鮮民衆による華僑虐殺暴動を巡って」、愛知学院大学人間文化研究所『人間文化』第二号、二〇〇七年九月。
- ②同「満洲事変と第一次上海事変―十九路軍と東北義勇軍の対日抵抗の実態と特質」『人間文化』第三二号、二〇一七年九月。
- ③同「蒋介石の『反共建国』政策と中国共産党の『長征』―対日戦争準備と第三勢力」『人間文化』第三五号、二〇二〇年九月。
- ④同「抗日戦争要求の拡大と西安事変」愛知学院大学『文学部紀要』二〇一六年三月。

「軍事革命」と近代国家の形成

小林 隆夫

西洋近代国際関係史の最たる特徴は、ヨーロッパにおいて形成された近代国家、ないし主権国家が相互に織りなした関係である。主権国家は独立国ともいわれ、国内事項の処理や国外の様々な行動主体との関係において、いかなる外部からの支配からも自由である国家と定義づけられる。

このような西洋近代国家の出現と形成

の理由として挙げられるものが、近世初期に起こったとされる軍事革命 (the military revolution) ないし火薬革命 (the gunpowder revolution) と称されるものである。そのイメージは、大体つぎのようなものになるであろう。

十三世紀以降、中国からイスラム圏を経由して伝わった火薬の爆発衝撃力を利用して、ヨーロッパ人は大砲を改良し、さらに鉄砲を開発し、十五世紀末までにはヨーロッパ全域における戦争においては、これらの火器が用いられるようになった。火器の戦闘における大規模な導入は、中世封建制時代の戦争の花形であった騎士身分と中小封建領主の没落をもたらした。中小領主は権力基盤であった石造りの城 (中世の弓槍を主体とした戦闘方法では難攻不落であった) を砲撃によって容易に破壊された。馬と槍の合体によって突進し敵を撃破した騎士もまた、農民主体の歩兵鉄砲隊の攻撃の前に崩壊した。火器を主体にした戦闘隊形が一般化すると、より大規模な軍隊を調達できる大領主、国王が中小領主を従えて権力を拡大し、統一国家を形成、いわゆる官僚制、国境、常備軍という外見の特徴を備えた西洋近代国家が出現した。国境線とはより大規模化し、城を粉碎できる大砲を備えた敵軍をできる限り遠距離で防ぐための防衛ラインであり、常備軍とは恒常化した戦争に対応するための国王直属の軍隊である。そして官僚とは、戦争に備えるための情報や軍事資金を徴収するための組織であり、外務省とは敵の情報を取集するための、大蔵省とは軍事資

金を調達するための組織である。言い換えれば近代国家とは戦争を効率よく進めるためのマシンである。国境とは敵の攻撃を遠距離で防ぐための装甲であり、戦争を効率的に実施するための軍人の機構が常備軍であり、文人の組織が官僚制に他ならない。

このように軍事革命の効果と影響を描くことは、現在ではほぼ一般化しており、高校世界史教科書においても登場するようになった。たとえば山川出版社刊の『詳説世界史B』においては、つぎのように述べている。

「戦争は長期化・大規模化し、軍事技術が進歩していた。増大する兵員と軍事費の調達のために、各国は徴税機構を中心に官僚制をそなえた行政組織を整備し、国内の統一的支配を強める必要があった。この過程で多くの国は、自己の支配領域を明確な国境でかこいこみ、国内秩序を維持強化して、外に対しては主権者としての君主のみが国を代表する体制を築くようになった。こうした国家を主権国家といい、近代国家の原型となった」(二一四―二一五ページ)

ところで、このような軍事革命が近代国家をつくったという説を最初に唱えたのはマイケル・ロバーツ (Michael Roberts) であり、彼の論文「軍事革命、一五六〇―一六六〇年」(一九五五) においてであった。ロバーツは主として十七世紀初頭のスウェーデン、特にグスタフ

フリードルフ王の治世と三十年戦争への介入を調査し、戦術上の変化によって官僚制という専門的職業主義とより大規模で恒久的な国家軍隊の台頭の間相互補完的關係があると主張、その期間、一五五〇年から一六六〇年の時期を軍事革命と命名した。

ジェフリー・パーカー (Geoffrey Parker) は、ロバーツの説をさらに推し進め、軍事革命は一五〇〇年から一八〇〇年の時期を包摂するものとし、近世ヨーロッパで培われた新しい軍事方式がヨーロッパ人による海外帝国の獲得に寄与したことを強調した。

しかし、一五〇〇年から一八〇〇年という期間を単に「軍事革命」という用語でひとくくりに概念化することには批判も生まれた。ジョン・チャイルズはつぎのように批判した。

「軍事革命」というのなら、一六九〇年から一九九〇年までの間に、軍事兵器は火打ち石式の銃から水爆という飛躍的な破壊力をもつ兵器までの変貌を遂げているのであり、この時代をむしろ真の、ないしは「第二次軍事革命」と呼ぶほうがふさわしいのではないか。いずれにせよ、革命という表現はごく短期間に突然起こる現象であり、数百年間にわたって起こった現象を革命というのは適切ではない。

ジェフリー・パーカーは後に編纂した『ケンブリッジ図説戦争史』(一九九五) において、一三〇〇年から一五〇〇年の

時期を「軍事革命」とはせず、「火薬革命 (The Gunpowder Revolution)」と呼んでいるのは、このような批判を考慮した結果かもしれない。

もっともジェレミ・ブラック (Jeremy Black) は、いわゆる一五六〇年から一六六〇年の間に起こったとされる軍事革命は、スウェーデンとネーデルラント連邦の事例に基づくのみであり、その他のヨーロッパの主要な国々の場合においては同様な経験はあてはまらない。したがって、多くの国々における軍事革命は正確にはその後の百年間にあてはまるものだと主張した。それゆえ、ブラックは、

常備軍が火打ち石銃と差し込み式の銃剣をそなえた戦争を展開するようになった十七世紀後半の時代こそが厳密な意味での「軍事革命」の時期であると主張した。

問題は、軍事力の拡大と戦闘技術の革新が国内の安定、国家統一をもたらしただのか否かということである。ブラックは逆に、国内が安定した結果として、軍事力の強化拡大が達成されたのだと論駁しているのである。産業が未発達で、国家のほぼ唯一の富の源泉が農業であった近世初期ヨーロッパにおいて、軍事資源を生み出すものは農業・農民であり、農民人口すなわち国家人口の大小こそが国家が遂行できる戦争の規模や頻度に影響を与えることは明白であるというのである。

国家の遂行する戦争が、その国力・資源と相関関係にあることは明白である。戦争に勝利して領土を拡大すればするほど戦争に動員できる資源・富もより多く獲得できることになる。征服によって大

きな戦争資金を調達できればできるほど、国家が遂行できる戦争の規模もより大きなものになる。戦争の規模をより拡大できれば、征服地もより多く獲得でき、そこから生み出される資源はさらに大きな戦争の遂行を可能にさせる。戦争が国家を大きくしたのか、それとも国家の規模の拡大や安定が大規模な戦争の遂行を可能にしたのか、どちらが先かについては明確ではない。

軍事革命論のつぎの問題は、常備軍がいかんして形成されたのかということである。中世は権力が幾層にも分散した時代であり、王権は微弱であった。国王は比較的大きな所領を持つ貴族の一人であったが、その所領から得られる資源のみでは王国全体を防御することは不可能であった。(中世レベルにおいて) 大規模な戦争を行うときには当然国王は封建家臣に軍事支援を要請せざるを得ない。つまり中世の戦争は国王と彼に盟約を誓う

封建家臣団が提供する連合軍によって行われたのである。その際、封建家臣はその戦争が自らの利益に合うかどうかを軍隊提供時の判断材料とする。その戦争が自らの利益に適うとすれば軍隊を提供し、そうでなければ戦争には協力しない。言いかえればこれら封建家臣、地方権力者は抗争のために暴力を使う権利を持っていたので、彼らが王権に逆らっても、その行為は反乱、裏切り、無法とは見なされなかったと言える。

軍事編成から見れば、重装騎士は比較的大きな貴族が供給する高価な軍隊であり、歩兵は地主の召使いや農民、あるいは

都市やギルドから供給され、市民軍を構成していた。職業的な騎士や歩兵部隊もしばしば他国からも雇われたが、彼らが王権に忠誠を誓うか否かは金次第であった。

指揮系統にしても、封建領主が不揃いの武装民を供給しているような状況では、兵士は顔見知りの貴族の指揮に従って行動するために全体としての指揮系統は存在しないか、あっても複雑化した。

結局中世における戦争は、社会的諸勢力のまとめ役としての王権なしには他国と大きな戦争はできなかったと言える。よって王権、中世国家の支配者は政治的主導権や戦略的統率力・指揮を行使したが、軍事力を行使できる権力は地域勢力に与えられているため、こうした中世のエリートらの積極的な協力がなければ、国家は作戦上の軍事能力を持つことができなかった。こうした中世の軍隊をジャン・グリート (Jan Glete) は国連軍と

NATO軍の中間的性格を持つものとして巧みに例えている。国連は運営可能な自らの軍を持たず、その加盟国からの自主的な努力に依存している。一方NATO軍はその加盟国の軍の一部を管理するが、NATOの管理下で軍を動かすときには、軍を提供する加盟国の広範な政治的合意が必要となる。

それでは、このような中世的軍隊から国王に直属する常備軍はどのようにして生まれてきたのか。王権がこうした半ば独立的で反動的な混成軍がきわめて指揮しづらいため、王権に直属する専門

の軍隊に常備軍を編成しようとしたという説明は十分首肯できる。小規模な常備軍は十五世紀中頃から存在していたが傭兵を中心とする小規模なものが多く、近代的常備軍はスウェーデン王グスタフ二世が十七世紀初めにつくったものを各国が模倣するようになったとされる。常備軍のメリットは臨時に編成される軍隊と異なり、王権に対する忠誠心が高いばかりか、練度の高い兵士を確保できる効果があった。近世の戦闘で用いられたマスケット銃は命中精度が低く、そのため斉射することで最大の命中精度を確保した。銃弾は一度ずつ装填するため、つぎの斉射までにはかなりの時間を要する。そこで、第一列が斉射を終えると、第二列が斉射を行い、そして第三列がそれに続く。斉射を終えた各列は、他の列が斉射を行っている最中に銃弾を装填し、つぎの斉射にそなえる。このようなローテーションによる斉射過程を円滑に進めようとするには、熟練した歩兵の訓練が必要であり、それが常備軍を編成する必要が生まれた理由である、とロバーツはいう。

これに対してチャイルズは、『一七世紀における戦争』(二〇〇一)において、近世のヨーロッパの戦争の形態は攻城戦が主体であり、要塞の建設技術と防衛力の向上によって、攻城が困難・長期化したことを指摘している。つまり要塞の防御力を高めるためには、練度の高い守備隊を常駐させる必要があり、それによって常備軍をそなえる需要が一層高まったのだと述べている。それにしても、もし火器の使用が近代

国家を生み出したとするのならば、なぜヨーロッパ諸国に先立って火器を大規模に使用したオスマン帝国が、近代国家に変容しなかったのでしょうか。オスマン帝国は15世紀の半ばのビザンツ帝国の攻略に大砲を数十門使用し、難攻不落であったビザンツの城砦を破壊しているのである。それがなぜ近代国家の形成において西洋に後れをとったのか。この解答は、西洋諸国間に頻繁に繰り返された戦争が様々な戦闘技術の革新や国家運営のしくみを変えていった事情に求められるべきものなのかもしれない。

戦争は敗北した方が滅亡するかもしれないという過酷な闘争である。勝利のために指揮官は絶えず新しい戦法を追求し、時代遅れで利益を生み出さない技術は容赦なく切り捨てる。雨天では使用できない火縄銃は火打ち石銃に取って代わられ、歩兵による方陣体系は直線上の陣形へと変化し、中世の混成軍は常備軍へと代わっていった。こうした変化は突然一時におきるものではなく、その意味で、チャイルズが指摘するように、「革命的」というよりも、「進化的」というほうがより適切であるだろう。

参考文献

Jeremy Black, *A Military Revolution?: Military Change and European Society, 1550-1800*, Houndmills and London, Macmillan, 1991.
 Jeremy Black, *War and the World: Military Power and the Fate of Continents, 1450-2000*, New Haven and London, Yale

University Press, 1998.

Jeremy Black ed., *European Warfare, 1453-1815*, Houndmills and London, Macmillan, 1999.

Geoffrey Parker, ed., *Warfare: Cambridge Illustrated History*, 1995.

Brian Downing M., *The Military Revolution and Political Change*, Princeton, Princeton University Press, 1992.

Clifford Rogers, *The Military Revolution Debate*, Florida, Westview Press, 1995.

Charles Townshend ed., *The Oxford Illustrated History of Modern War*, New York, Oxford University Press, 1997.

John Childs, *Warfare in the Seventeenth Century*, Washington, Smithsonian Books, 1999.

ジェフリー・パーカー、「長篠合戦の世界史・ヨーロッパ軍事革命の衝撃 1500～1800年」同文館、一九九四年。
 木村靖二他「詳説世界史B」山川出版社 二〇二一年。

E-learning教材「ぢゅつとe」に関する実践報告

星 久美子

「ぢゅつとe」とは、オンライン上で取り組める大学生を対象としたE-learning教材である。広島市立大学国際学部の青木信之教授と渡辺智恵教授が発案・開発したIETW(Intensive English Training on the Web)が元となってお

り、このプロジェクトは二〇二二年度に文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」に採択されている。二〇二二年度には広島市産学官共同研究開発補助を受けて本格的に始動、二〇二三年度より他大学との共同研究を始め、二〇二五年度より一般販売が開始された。現在では、名古屋大学、立命館大学、島根大学、広島市立大学、広島修道大学など、英語の授業に導入する大学が年々増えている。たとえば、広島市立大学国際学部では、「CALL英語集中」という授業で導入しており、二〇一八年度の受講者のTOEIC Pスコアの平均が、入学時に比べ、受講後に六八・三点アップし、五四一・八点になったという報告があり、著しい学習効果を上げていることがわかる。

愛知学院大学文学部英語英米文化学科では、この「ぢゅつとe」を、二〇一九年度秋学期、二年生対象の英語必修科目「イングリッシュ&カルチャーIIb」で始めて導入した。二〇二〇年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により多くの大学が急遽オンラインやオンデマンドでの対応を迫られるなか、本大学では春学期の前半はMIS（つまりWeb Campus）を利用したオンデマンド授業、後半はMicrosoft Teamsを利用したオンライン授業、秋学期は対面授業、オンライン授業、ハイブリッド授業など、複数の授業形態で行われた。このような状況において、本学科では、学生の英語学習を安定的に支援するために、春学期に一年生対象の「イングリッシュ&カルチャーIa」、秋学期からは一〜三年生対

象の「イングリッシュ&カルチャーIb〜IIIb」において「ぢゅつとe」を導入することとなった。

「ぢゅつとe」を導入した「イングリッシュ&カルチャーI」は、本学科の一〜三年生が受講する英語必修科目である。基礎的なリスニング力・語彙力・文法力・読解力など、総合的な英語力を習得し、とくにTOEICスコアを向上させることを目標としている。習熟度別クラス編成を行っており、一年生については入学時のプレースメント・テストの点数、二年生以上については前年度に行われた二回のTOEIC Pテストのスコアの平均点により四レベル、五クラスに分けている。

市販のE-learning教材の中から「ぢゅつとe」を選定した理由は以下の通りである。

(一)「ぢゅつとe」には、リーディング、ボキャブラリー、リスニング、グラマーのプログラムが用意されており、「イングリッシュ&カルチャーI」の授業目標である総合的英語力の習得に適している。

(二)「ぢゅつとe」には、「基礎」「初級」「中級」「上級」と四つの対象レベルが用意されており、それぞれにTOEICスコアの目安が提示され、クラスに応じたレベルを選択できる⁴。

基礎 TOEIC 三五〇点以下／英検二級

初級 TOEIC 三〇〇〜五〇〇点／英検三級・準二級

中級 TOEIC 四五〇〜六五〇点／英

検準二級・二級
上級 TOEIC 六〇〇〜八〇〇点/
英検二級・準一級

(三) 「ぎゅっとe」の問題形式、とくにリスニングは、TOEICの問題に類した形式となっており、「イングリッシュ&カルチャー」の授業目標であるTOEICスコアの向上に適している。

(四) クラスの担当者が学習者の学習進捗状況と学習結果を把握することができる。

(五) インターネット接続ができれば、Windows PCおよびMac、また推奨はされていないものの、タブレットやスマートフォンでも利用可能であることが確認されている。

(六) 一人あたりの価格が安価である「リーディング+ボキャブラリー」一セット(四〇〇円)、リスニング一セット(八〇〇円、二〇〇円)。

二〇二〇年度は、「ぎゅっとe」を導入した「イングリッシュ&カルチャーIb」、「イングリッシュ&カルチャーIIb」、「イングリッシュ&カルチャーIIIb」の受講者を対象にアンケート調査を実施した。調査期間は二〇二一年一月九日(土)から一月三十一日(木)、Google Formsを利用した。同時期に複数のアンケートが行われており、また遠隔での周知が徹底できなかったため、回答数は六九で、残念ながら全体像を正確に把握するには不十分と言わざるを得ない。ただし、回答者のうち五三が上位クラス(AクラスとBクラス)の所属だったことから、上位クラスにおける実態はある

程度、把握できるものと考えられる。

今回のアンケートで今後のための参考のできる質問項目は、学習効果に関するものである。TOEICのスコアアップの役に立ったか、総合的な英語力の向上に役に立ったかという二点をたずねた。五三回答のうち、TOEICのスコアアップに役に立ったかについて五段階評価(まったくそう思わない、「そう思わない」、「どちらとも言えない」、「そう思う」、「強くそう思う」)でたずねた項目で、「まったくそう思わない」二名、「そう思わない」三名、「どちらとも言えない」二八名、「そう思う」二〇名、「強くそう思う」六名であった。「どちらとも言えない」という回答を除くと、「そう思う」と「強くそう思う」という肯定的な回答が二六で、約半数だった。その理由として、「実際にTOEICの点数が上がった」、「リスニングはTOEIC対策にとっても役に立ったと感じた」、「ぎゅっとe」のReadingをやっていたおかげでTOEICの本番では長文を速く読むことができた実感した」という回答が複数見られた。

一方、総合的な英語力については、「まったくそう思わない」〇名、「そう思わない」五名、「どちらとも言えない」一八名、「そう思う」二五名、「強くそう思う」五名という結果であった。こちららも「どちらとも言えない」という回答を除くと、「そう思う」と「強くそう思う」という肯定的な回答が三〇で、半数以上だった。その理由として、「家での学習が難しいリスニングの練習が手軽にでき

た」、「一人で効率的に学べると感じた」など利便性に関する回答が目立った。

今回のアンケート結果により、上位クラスにおいてはTOEIC学習および総合的な英語力の双方において学習効果を感じている受講者が多かったということが明らかとなった。ただし、回答数の少なかつた下位クラスにおいては、「きちんと取り組めなかった」や「身についていると思えない」といった否定的な回答が見受けられた。このことから、下位クラスにおいては、クラスでの計画的な取り組みや動機付けなど、教員によるより積極的で、きめ細やかな指導が必要であることが示唆された。

最後に、英語英米文化学科は、二〇二一年度より新カリキュラムを開始し、現カリキュラムにおける「イングリッシュ

プロジェクト研究

英国グランドツアーの観光形態

次世代の持続可能な「観光SDGs」に向けて――

松岡 昌幸

観光研究は、二〇世紀以降に本格的な広がりを見せ、日本においても一九六〇年代以降のマス・ツーリズム(大量・大衆旅行)の展開に加え、一九九〇年代後半以降には観光を専門領域の一つとして取り扱う大学が増加し、その研究が進められてきた。また、観光教育の主眼は一九六〇年代のマス・ツーリズムから、一

&カルチャー」は「English for TOEIC」へと名称変更、TOEIC対策という授業の目的をより一層、明確とした。今後、「ぎゅっとe」のより効果的な活用方法を模索していきたい。

注

- 1 <http://gyuto-e.jp/school/infomation/development/index.html>
- 2 二〇一八年度後期には、一八校で導入、学習者は一一〇〇名。 <http://gyuto-e.jp/school/school/results/index.html>
- 3 <http://gyuto-e.jp/school/infomation/learning/study.html>
- 4 http://gyuto-e.jp/school/free_tanken/index.html
- 5 http://gyuto-e.jp/school/free_tanken/index.html

中間報告

九七〇年代のオールタナティブ・ツーリズム(もう一つの観光)に移り、一九九〇年代からは、サステイナブル・ツーリズム(持続可能な観光)へ、そして昨今では、「観光SDGs」の標語が誕生する等、観光が地域貢献・創成に寄与する観光教育へと変化している。ここでは、英国で実施された教育観光の形態であるグランド・ツアーを事例として取り上げて、当時のグランド・ツアーがどのような観光スタイルであり、本質的には、どのような特徴があるのかを明らかにすることを目的とする。

一八世紀の後半から一九世紀の前半にかけて、盛んに英国貴族の子息達が実施したグランド・ツアー(Grand tour)がある。直訳すれば「大周遊旅行」であるが、当時の欧州大陸に行く旅のことで、最初の訪問地としては主にフランスが選ばれた。しかし、大周遊旅行としての目的は、英国貴族の子息達が教育や教養を身に付けることに主眼が置かれ、本質的には教育の実践に役立つ観光(旅行)で、「教育のための観光」という言葉に言い換えることが可能である。

旅の教育的意味は、「通過儀礼」(Rite of Passage)に例えられる旅の特徴に見てとれる。通過儀礼とは、人々が新たに社会的地位を獲得するための儀式で、その典型的構成は、個人生活において、従来の状態から離脱する「分離期」、生死の試練を克服する「移行期」、新たな地位を認められ、社会に復帰する「再生期」の三つに区分される(安村、二〇〇一)。

つまり通過儀礼とは、人々が現在、所属する集団を一旦離れ、試練や苦難を乗り越えて、新たな自分(自己)に生まれ変わり、再び元の集団に回帰する、あるいは受け入れられる過程であり、それは一人で旅に出た若者が苦難に直面しながら修行を続け、成長して帰郷する、いわば旅のパターンと同型であることから、ここに通過儀礼としての旅の教育的意味があると考えられる。

安村(二〇〇六)によると、こうした旅の教育的意味は、近代化に伴って様相を変えながらも、近代観光にも受け継がれ、「教育のための観光」が成立したと

し、それが歴史上に顕著な形となって現れたのがグランド・ツアーで、近代初期のヨーロッパにおいては、貴族、富豪、学者、芸術家等が、自己啓発を目的として、フランスやイタリアの主要都市を旅行する社会現象であったと指摘している。しかしながら、このようなグランド・ツアー(教育のための観光)、つまり通過儀礼的な旅は、旅行の範疇ではなく、むしろ異文化体験を主眼とする留学形態の範疇に入れる方が、より自然ではないかと考える。つまり、「留学」概念を検討すると、「観光」概念と同様に、極めて多義的な意味を含み、留学とは本来、本質的な行為においては、その土地に留まって、様々なことを学習(修得)し、通過儀礼的にモラトリアム期間(猶予期間)を経ることによって成長し、新たな門出を向かえることを意味するからである。また、今日の留学形態は、特に私費を中心とする短期留学スタイルにおいて、学問や専門的技術を修得する伝統的なスタイルではなく、文化的学習者としての関心を強めているからである(松岡、二〇〇八)。

よって、当時のフランスやイタリアを中心に行なわれたグランド・ツアーは教育のための観光の範疇でもあるが、むしろ、今日の留学スタイルに通じる留学形態の一つと言っても過言ではない。つまり、当時のグランド・ツアーの本質は、一つの場所(地域)に留まらず、異文化体験や生活体験、あるいは人との交流や民族的な学習等を主眼とする「体験・交流型」留学であったからである。

本城(一九八三)によると、グランド・ツアーの最初の目的地となったのは、フランスで、パリにおいては、ルイ一四世以来、ヨーロッパの宮廷人の手本となった洗練された会話術や礼儀作法を身に付けることに主眼が置かれていた。当時のフランスへの交通手段は、船と馬車であったが、本城(一九八三)によると、欧州大陸に旅立つ若様は、先ず船に乗るために、ドーヴァー港に向かい、その港に辿り着くまでには、駅馬車だと途中で馬を五回程換えて、ロンドンからは丸一日がかりの旅であったと整理している。また、ドーヴァー海峡からは、「パケット・ボート」と呼ばれる小船が使用され、フランス(カレー)に要する時間は、風任せのため、早くて二時間四五分、気象条件が悪い時には、六時間も要することもあったとしている。さらに、フランス(カレー)への上陸後は、馬車(二輪馬車)を各自、購入して目的地へ向かったのである。このように当時の船や馬車は数多くの留学生達の重要な足であり、今日の発達した交通手段と比較する上においては重要な歴史的事例である。

本城(一九八三)によると、グランド・ツアーの最初の目的地となったのは、フランスで、パリにおいては、ルイ一四世以来、ヨーロッパの宮廷人の手本となった洗練された会話術や礼儀作法を身に付けることに主眼が置かれていた。当時のフランスへの交通手段は、船と馬車であったが、本城(一九八三)によると、欧州大陸に旅立つ若様は、先ず船に乗るために、ドーヴァー港に向かい、その港に辿り着くまでには、駅馬車だと途中で馬を五回程換えて、ロンドンからは丸一日がかりの旅であったと整理している。また、ドーヴァー海峡からは、「パケット・ボート」と呼ばれる小船が使用され、フランス(カレー)に要する時間は、風任せのため、早くて二時間四五分、気象条件が悪い時には、六時間も要することもあったとしている。さらに、フランス(カレー)への上陸後は、馬車(二輪馬車)を各自、購入して目的地へ向かったのである。このように当時の船や馬車は数多くの留学生達の重要な足であり、今日の発達した交通手段と比較する上においては重要な歴史的事例である。



グランド・ツアーにとって重要な足になった馬車

注) William Edward Mead (1972), *The Grand Tour in the Eighteenth Century*, Benjamin Blom, Inc. p. 54 から著者引用。

は、どのようなことを体験し、どのようなことを学習したのか。次の表1は、本城(一九八三)が整理した行動実態を基に、特に何を体験したのかという視点から分類したものである。その結果、以下の4つの区分に大別することが可能になった。その4つの区分は、①「生活体験」、②「自然体験」、③「社会体験」、④「教育体験」である。

表1によると、当時の子息達のグランド・ツアーは、先ず「生活体験」では、フランス語を始め、食文化、ファッション、芸術、建築物等に接触および体験し、当時のフランスにおける異文化を学習し

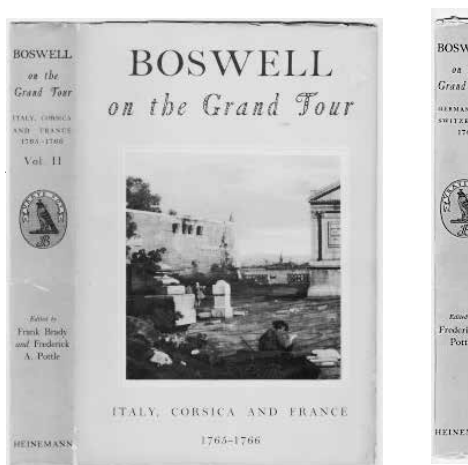
表1 グランド・ツアーの体験別類型

体験別類型	実際の体験
①生活体験	<ul style="list-style-type: none"> * フランス語の修得 * フランス料理 (ワイン含む)、料理法の体験 * フランス芸術、美術、文化等の体験 (ファッション、ルーブル宮殿の絵画、彫刻、オペラ座、仮装舞踏会、大衆演劇等) * フランス建築物の体験 (ベルサイユ宮殿、ルーブル宮殿、ノートルダム寺院、教会、パリの通りや街燈等) * 風俗体験 (パリの売春婦、風俗店体験等)
②自然体験	<ul style="list-style-type: none"> * フォンテンブローの森 * ブルゴーニュ地方のぶどう畑 * 南フランスの田園風景 * アルプスにつながる山並み (アルプス高峰等) * ライン河の滝 * パリ並木道、その他公園内の散歩等 * 乗馬、テニス、射撃等のリクリエーション、アウトドア等
③社会体験	<ul style="list-style-type: none"> * パリの社交会 (ブルヴァール、サロン等) * パリのレストラン (グラン・ヴェフル) * パレ・ロワイヤル (パリ第一のショッピングとレジャーの中心) * カフェ・ド・フワ (当時の過激派の集会所) * 英国館、ロンドン館 (一流ホテル体験) * 王立工場 (ゴブラン織り、セーヴルの焼物体験) * フランスの風俗と賭博等の体験
④教育体験	<ul style="list-style-type: none"> * ソルボンヌ大学での学問修得 * ルーブル宮殿 (数多くの美術館や博物館への訪問)

た。また、「自然体験」では、フランスの豊かな森やブドウ畑、広大な田園風景やアルプス高峰等を体験し、あるいは盛んなレクリエーションやアウトドアによる豊かな人的交流を通じ、人との交流術や自然美を学習した。また、「社会体験」では、社交会、レストラン、一流ホテル、あるいは風俗等を体験し、フランス独自の社交術、会話術、審美眼を含めた幅広い教養を身に付けていった。そして、「教育体験」では、数多くの美術館、博物館への訪問や、大学(高等教育機関)では、先進する専門的知識や学問等を修得したのである。

表1を基に、さらに内容分析や考察を加えると、「教育体験」(学問的体験)の記述(文言)が、他のカテゴリ(生活体験、自然体験、社会体験)と比べると少ないことが看取され、当時のグラン・ツアーの形態は、高度な学問や技術を身に付けることを主眼とした留学というより、観光旅行的な意味を含む、非日常生活圏での楽しみを目的とした形態で、その行動形態は「あちこちと渡り歩く一種の流れを重視した流学スタイル」と形容することが可能である。つまり、人々との有効な交流や異文化を積極的に体験する流れを重視した「体験・交流

型」留学の特徴が看取されるのである。これら英国貴族の子息達のグラント・ツアーに看取される流れを重視した「体験・交流型」留学は、一般的な正規留学の形態(学問や専門知識等を修得する留学形態)とは異なるものであるが、その形態は、必ずしも先進する知識や技術の伝習、修得等の狭い範囲の事がらに限られたものではなく、文化学習者としての留学への関心を強めた性格で、その背後にある文化そのものを探る留学形態であり、別言するならば、もつと広くはそれを支える基盤としての広義の「文化」を探索する留学的観光である。そして、当形態は、次世代における新たな観光のあり方を考える上において有効なヒントを与えてくれるものである。つまり、負的教育効果を含有するマストツーリズム(大量・大衆旅行)に代わる新たな持続可能な観光スタイル(サステイナブル・ツーリズム)に繋がる可能性があるからである。



注) 写真は下記の文献(表紙)を著者撮影。
 ・Boswell James (1765-1766), *Boswell on the Grand Tour, Italy, Corsica, and France*, Edited by Frank Brady and Frederick A. Pottle.

型」留学の特徴が看取されるのである。これら英国貴族の子息達のグラント・ツアーに看取される流れを重視した「体験・交流型」留学は、一般的な正規留学の形態(学問や専門知識等を修得する留学形態)とは異なるものであるが、その形態は、必ずしも先進する知識や技術の伝習、修得等の狭い範囲の事がらに限られたものではなく、文化学習者としての留学への関心を強めた性格で、その背後にある文化そのものを探る留学形態であり、別言するならば、もつと広くはそれを支える基盤としての広義の「文化」を探索する留学的観光である。そして、当形態は、次世代における新たな観光のあり方を考える上において有効なヒントを与えてくれるものである。つまり、負的教育効果を含有するマストツーリズム(大量・大衆旅行)に代わる新たな持続可能な観光スタイル(サステイナブル・ツーリズム)に繋がる可能性があるからである。



注) 写真は下記の文献(表紙)を著者撮影。
 ・Boswell James (1764), *Boswell on the Grand Tour, Germany and Switzerland*, Edited by Frederick A. Pottle.

「ツーリズム」(農業・農村体験型観光)、「ヘリテージ・ツーリズム」(遺産学習型観光)等があげられるが(JTB総合研究所、二〇二二)、その観光形態は観光開発、整備段階における環境や地域への配慮はもとより、旅行者への啓発・教育的活動が中心となる。その中で特に教育的活動を主目的とする教育観光(エデュケーション・ツーリズム)の学習対象には、安村(二〇一一)によると、「語学」「歴史」「文化」「芸術」「民族」「自然・

生態系「動植物」「景観」「建築物」等が多岐に渡るとされている。

松岡(二〇〇八)は教育観光を「観光旅行を教育の一環として捉える形態で、教育旅行、視察旅行等の見聞を広める、幅広い教養を身に付ける、自己啓発等の教育を主目的とし、本来の留学形態も含む(一三六頁)と整理した。さらに松岡(二〇〇八)は、新たな教育観光の範疇としての留学的観光を「留学と観光旅行の融合による新たな観光スタイルで、ある特定の地域や観光地を素通りする速足観光ではなく、留学の語義にもあるように、ある地域に留まって、地域に根ざす文化、歴史、産業等を学習し、さらに地域の人々と交流し、異文化体験することによって、双方向的な文化受容や文化運搬を齎す教育観光の形態」と整理した。そして、ここでの「留まる」は比較的、長時間であり、「学習」は、移動が伴う流れを重視した留学形態であり、文化(物質文化≡モノ、中間文化≡コト、精神文化≡マインド)、「体験・交流」(自然、人的)、「異文化の受容、運搬、伝播」(文化伝播)を主とする学習行動を意味する。

このような文化学習的な観光形態は、既に英国で実施されていたのである。つまり、その本質は、観光と留学が融合された留学的観光であり、移動を伴う流れを重視することによって、各国の異文化の受容、そして、自国への運搬、伝播に貢献したのである。そして、その相貌は本来の観光の語源(観国之光。利用資于王)の光を観る(註一)にも通じる

観光スタイルであり、次世代の持続可能な「観光SDGs」を考える上において重要な歴史的観光事例である。

(註一)

松岡昌幸(二〇二一)「留学と観光概念の検討とその関係性」南九州短期大学研究紀要第一七号、四五―六八頁を参照。観光の語源は古代中国「周一」の時代に編纂された『易経』(卜筮)の中にみられる。

〈参考文献〉

- ・ JTB総合研究所(二〇二一)『観光学基礎』JTB総合研究所、二六三―二六七頁。
- ・ Boswell James(1764), *Boswell on the Grand Tour, Germany and Switzerland*, Edited by Frederick A. Pottle.
- ・ Boswell James(1765-1766), *Boswell on the Grand Tour, Italy, Corsica, and France*, Edited by Frank Brady and Frederick A. Pottle.
- ・ 本城靖久(一九八三)「グラランド・ツアー 良き時代の良き旅」中公新書。
- ・ 安村克己(二〇〇一)「観光教育の意味と教育体制の発展」徳久球雄・安村克己編纂『観光教育』くんぶる、十一頁。
- ・ 安村克己(二〇〇六)「観光と教育・福祉」前田勇編著『現代観光総論、第三版』、一四二頁。
- ・ 安村克己(二〇一一)「新しい観光の登場」安村克己・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟編著『よくわかる観光社

- ・ 会学』ミネルヴァ書房、三六頁。
- ・ 松岡昌幸(二〇〇八)「コノシユア・シニア留学」アップフロントブックス、二四、三六頁。
- ・ William Edward Mead(1972), *The Grand Tour in the Eighteenth Century*, Benjamin Blom, Inc. p. 54.

共同プロジェクト研究「旅文化をめぐる学際的研究」報告書

南知多の西国三十三所巡礼 絵馬―女性たちの旅

小林 奈央子

西国三十三所とは、近畿地方を中心に点在する観音菩薩を安置する三十三の寺院をいう。これら三十三の寺院を札所とした西国三十三所巡礼では、和歌山県の那智青岸渡寺を第一番札所、岐阜県の谷汲山華嚴寺を三十三番の満願結願の札所としている。巡礼の起源は、大和・長谷寺の開基徳道上人と花山法皇にあるとする説が広く流布しているが、史実とは認められず、平安末期に生きた三井寺の僧、行尊と覚忠による三十三所の観音霊場巡礼記が、現行の西国三十三所の前身を示す古い史料と考えられている。

十五世紀には現在と同じ巡礼体制がほぼ出来上がっていたとされ、現在でも近畿の二府四県と岐阜県にまたがる総距離約一〇〇〇キロの巡礼道として人びとの信仰を集めている。令和元年(二〇一九)五月には、「一三〇〇年づく日本」の終

活の旅(西国三十三所観音巡礼)として、文化庁による日本遺産に登録された。なぜ「終活」なのか。文化庁によれば「自分の人生に向き合うことは、老若男女関係なく誰しもが通らなければならない道」であり、その「自分の人生に向き合う旅」が、一三〇〇年ものあいだ続いてきた西国三十三所観音巡礼であり、「究極の終活の旅」としての価値が見出されているからという。

西国三十三所巡礼が「究極の終活の旅」としての価値があるのかはさておき、近畿圏と比較的近い愛知県からも歴史的に多くの巡礼者があり、とりわけ知多半島からは多くの人びとが西国巡礼に出かけていた。現在その一端を知ることのできる資料の一つとして、巡礼を終えた人びとが、無事の帰着を記念、感謝して地元(の社寺)に奉納した絵馬がある。

南知多町の奉納絵馬に関しては、いくつかの先行研究がある。本プロジェクトにも何度かお招きした元名古屋博物館学芸員・井上善博氏(現・蓬左文庫調査研究員)が中心となつて調査された『南知多町誌 資料編6』(一九九七)のほか、半田市博物館が、平成十一年に特別展「知多の絵馬」を開催し、その際の調査・研究の成果にさらなる追加調査の結果を加えた報告書『知多の絵馬―調査報告書』(二〇一〇)を発行している。これらの先行研究によると、西国三十三所巡礼関係の奉納絵馬は、知多半島に三十七点あり、歴史・故事図や三十六歌仙など他ジャンルの絵馬を合わせた全絵馬(二〇四八点)の約三十パーセントを占

めている。南知多町内だけでも四十九点
が確認され、同町内の全絵馬(二〇一点)
のうち、最も多い画題となっている。そ
れほど知多半島さらには南知多からの西
国三十三所巡礼への旅がポピュラーで、
人びとの関心も高かったことがうかがわ
れる。さらに特筆すべきは、世代や性別
を超えて老若男女さまざまな人たちが巡
礼していたが、女性たちの巡礼が盛んで
あった点である。

南知多町の寺院のうち、女性同行者の
名前がみられる西国三十三所巡礼の絵馬
を数多く所蔵しているのが、同町山海の
岩屋寺と内海の持宝院である。前出の井
上氏によれば、江戸時代中期(一七〇〇

年代、宝永から寛政年間ごろ)に奉納さ
れた絵馬から奉納者に地元の住人が増
え、女性奉納者の名前も出てくるとい
う。ただそのころは西国巡礼そのものの
様子を絵馬の構図に描くことはなく、武
者図など、巡礼と直接結びつく図様では
ない絵馬の裏面に、西国巡礼をおこなっ
たことを墨書するのみであるという。し
かしそれが、江戸後期(一八〇〇年代、し
享和から慶応年間ごろ)になると、長谷
寺や清水寺など西国三十三所巡礼の札所
の境内図が描かれるようになり、さら
に奉納者自らが巡礼者として登場するよ
うになるといふ。この理由について井上

氏は、「参詣客の集まる門前、あるいは
寺院自体が、参詣客相手に境内
図を刷り物としてさかんに頒布
するようになったということ
や、名所図会などの地誌類が江
戸時代後期に各地で編さんさ
れ、普及していったことなどが
あげられる」と分析している。
そして、名所図会などと同様、
社寺が俯瞰図の技法で描かれて
いることも特徴であるという。
西国三十三所の寺院のうち、
俯瞰図として描いた場合に印象
的な構図になるのが、「長谷寺の
長い大回廊や「清水の舞台」で
知られる清水寺である。長谷寺
は「花の御寺」としてもいまも
有名であるが、多くは満開の桜
とともに描かれ、一目で長谷寺
とわかる構図となっている。知
多半島に残る西国三十三所巡礼
の奉納絵馬でも長谷寺を画題とするもの
は三十五点を数え、最も多い(『知多の
絵馬』)。
岩屋寺に明治十四年四月に奉納された
西国三十三所巡礼の絵馬(写真1)には、
知多郡の古布村から五人、矢梨村から十
七人の計二十二人が同行として巡礼に参
加したことが、絵馬の下部に記されてい
る。このうち男性は、先達と思われる二
人で、残りは全員女性である。画中には
満開の桜と菅笠を被った回廊を渡る二十
二人の同行者の姿と長谷寺の僧侶と思わ
れる袈裟姿の人物が描かれている(写真
2)。先達の男性二人は女性たちより一
回り大きな姿で描かれており、巡礼を主



写真1 西国境内図豊山長谷寺(岩屋寺) 筆者撮影



写真2 西国境内図豊山長谷寺 回廊部分拡大(岩屋寺) 岩屋寺提供

導する様子が見て取れる。こうした奉納
絵馬は時代が下ると、巡拝記念写真額の
奉納という形態に変化していく。写真を
撮影するという技術がない時代、女性た
ちは自らが体験した西国巡礼の旅の思い
出を、奉納絵馬という形で地元の絵師に
忠実に描いてもらい、残したのである。
旅に出るといふ機会がほとんどなかった
当時の女性たちが、一生のうち一度ある
かないかの長旅の経験をどのような思い
で振り返っていたのか。そんな女性たち
の気持ちに思いをはせずにはられない。

現代宗教研究会 中間報告

伊藤 雅之
林 淳

一「宗教・スピリチュアリティ・神秘主
義の位相」 (伊藤雅之)

(一) コロナ禍の恩恵

二〇二〇年春頃から一年以上にわた
り、コロナ禍による社会的混乱が続いて
いる。こうしたなかにおいて、研究者に
とっての恩恵もある。オンライン会議が
劇的に普及したことである。テーマを限
定した研究、とりわけ面識のある者同士
の活発な議論においてオンライン会議は
とても便利だ。本年度の第一回現代宗教
研究会は、林淳氏、小林奈央子氏、伊藤
雅之のレギュラー・メンバーに、東京大
学名誉教授の鶴岡賢雄氏をゲストにお招
きしてオンラインにておこなった。実施

は二〇二〇年八月六日午後八時から約二時間である。

(2) スピリチュアリティへの多角的アプローチ

一九九〇年代以降、宗教学、社会学、心理学、看護学など多くの専門領域において、「スピリチュアリティ」をテーマとする書籍、論文の刊行が相次いでいる。たとえば、鎌田東二編『講座スピリチュアル学』は二〇一四年から二〇一六年にかけて全七巻が刊行された。そのなかでは、スピリチュアルケア、医療・健康、平和、環境、教育、芸術・芸能、宗教の七つのテーマについて、多様な分野の専門家による幅広い研究成果が報告されている。今回、研究会で取り上げたのは、このシリーズの最終巻『スピリチュアリティと宗教』所収の二論文である(ペイニング・ネット・プレス、二〇一六年)。一本はゲスト参加いただいた鶴岡賀雄著『スピリチュアリティ』と「神秘主義」——カトリック圏での用法を中心に」、もう一本は筆者がまとめた「ポスト世俗化時代のスピリチュアリティ——マインドフルネス・ムーブメントを手がかりとして」である。以下、ゲスト参加いただいた鶴岡論文を中心にまとめる。

①一六一—一七世紀の近世的神秘主義の成立(「神秘主義」概念の元型が生まれ、スピリチュアリティの語が多用された)

②一九世紀後半—二〇世紀前半の近代的神秘主義の台頭(神秘主義概念が構築される)

③二〇世紀末—二一世紀初頭の現代的神秘主義の発展(スピリチュアリティという言葉がある種の期待を込めて用いられる)

「神秘主義」は一九世紀の宗教関連諸学のなかで生まれた概念である。その成立には、当時の近代合理主義や啓蒙主義的世界観への批判、および宗教一般の教義や制度に対する不充足感が背景にあったという。それ以前の近世的神秘主義の時代においても、神学や教会の権威と分離する形で、キリスト教の真理を新たなかたちで語り、行じようとする動きが生まれていた。つまり、歴史的に異なる時期に興隆した二つの神秘主義は相似形にある。

つぎに鶴岡氏は、スピリチュアリティの語義の歴史の変遷を確認する。中世ラテン語におけるスピリチュアリティは、宗教と同義であり、教会への所属を前提としていた。しかし、一七世紀になると今日なら神秘主義とされる領域がスピリチュアリティと呼ばれ、キリスト教的生き方の高次のもの、聖人たちが到達している深い境地を指すようになる。そして一八世紀の反神秘主義的であった啓蒙主義の時代を経て、一九世紀末になるとこ

の思潮は復活する。二〇世紀はじめには、「スピリチュアリティ」と「神秘主義」がほとんど重なる形で新たに語り直されるのである。

二〇世紀末以降の現代スピリチュアリティは、近代的神秘主義が目指したところを引き継ぎつつ民衆化し、その源流にあつた近世的神秘主義の実践性、運動としての拡がりや新たな形で獲得しようとするものとなっている。この潮流は、「神秘主義」と名付けられたスピリチュアリティの、現代的な再興の試みとも言えるだろうと鶴岡氏は論じている。

もう一つの伊藤論文では、鶴岡氏のいうところの現代スピリチュアリティを全面に取り上げる。具体的事象としては、二一世紀に入って急激に普及してきた西洋式マインドフルネス瞑想について考察する。「いま、ここでのありのままの気づき」を重視するマインドフルネスは、人々のストレス軽減のための実践法として、心理療法、教育、ビジネスなどの現場で活用されている。これを現代社会の聖化あるいは再聖化として全肯定する論者もいる。同時に、伝統仏教に起源をもつ技法の非宗教領域への実利的な成果を求めての適用は、仏教瞑想の歪曲であるとする痛烈な批判もある。

本論文では、その両極の間にある主要な言説への批判的考察をする。具体的にマインドフルネスは仏教瞑想の断片化なのか、あるいは現代の社会状況に対応した再文脈化なのか。また仏教がもつ革新性は失われたのか、あるいは人々の苦しみを減らすというダルマ(真理)の

本質が現代的な形で表現されているのか。これらをめぐる議論を取り上げつつ、主流文化へ浸透する現代スピリチュアリティの特徴について究明した。

(3) スピリチュアリティへの共時的・通時的アプローチ

およそ人文社会科学の領域において、研究テーマを深めるためには、同時代の幅広い現象に視野を広げつつ(共時性)、背景となる歴史的展開(通時性)にも目配りするのが理想的である。現実には、一人の研究者がこの二つをおこなうことはきわめてむずかしい。それを補うのが研究協力であり、研究会の意義だろう。今回の研究会では、林氏のご発案により、以上で紹介した二論文を取り上げ比較検討することになった。おもにカトリック圏でのスピリチュアリティの展開を対象とした鶴岡論文、プロテスタントが支配的な国、とりわけアングロ・サクソン文化圏でのマインドフルネスの広がりやを扱った伊藤論文を結びつけていただいた。これにより、現代スピリチュアリティへの共時的理解を深め、より広範な地域における展開を把握することが可能となった。また小林氏には、二論文で扱われている数多くの事象を年表にまとめていただいた。ていねいな年表作成によって過去五百年にわたる宗教、スピリチュアリティ、神秘主義の関係についての通時的把握ができ、当日の活発な議論の土台をつくっていただいたと考える。今回のオンライン研究会によって、宗教、スピリチュアリティ、神秘主義の位

相に関する理解を少なからず深めることができたように思う。ゲストとして、ご参加いただき貴重な知見を提供いただいた鶴岡氏、スピリチュアリティに関する通時的、共時的理解を促進いただいた林、小林の両氏に心から感謝したい。

二「大本研究の最前線に学ぶ」

(林 淳)

一九八〇年代に、宗教社会学研究会を中心に新宗教研究が急速にさかんになった時代があった。一九九〇年に出た『新宗教事典』は、研究の到達点を示すものであった。それは、新宗教に関する多量な情報を整理し、体系的な綱目建てにおいて画期的な研究であった。しかし『新宗教事典』刊行以降、新宗教研究は活気を失った。その理由はどこにあったのか。第一に、一九九五年のオウム真理教事件の影響のあったことは一応は指摘できる。しかしそれだけではあるまい。第二に、特定の新宗教を調査した研究論文だけをもつて若い研究者が大学のポストをめぐる就職戦線で生き残ることはできるかどうかという問題はある。宗教学、社会学、人類学、歴史学という既成の分野において新宗教研究がどのような内実や水準になれば評価を得るのかは未知数であった。第三に、初期の研究では教祖のカリスマ性を探究することが多く、教祖以降の時代を対象化する研究が少なかった。また研究の中心を担っていた人が、時代の最先端の「新々宗教」や「新霊性運動」にジャンプし、早々に新

宗教の時代の終わりを宣言した。新宗教の時代が終わったのであれば、新宗教研究をやる現代的な意義は低下しよう。以上のような原因をもって新宗教研究は中断され棚上げされたと私は考えている。長く中断していた新宗教研究の扉を再開したのは、永岡崇氏であった。総力戦期の天理教、弾圧以降の大本を研究する永岡氏は、安丸良夫の民衆宗教史をよくふまえ、歴史学、思想史との関係を作りながら、教祖以降の歴史を描いている。先行の世代が残した大きな空白を埋める作業をポストコロナアルやジェンダーの研究をふまえて、永岡氏が行っているという印象はある。

機会があれば永岡氏と議論をしたいと考えていた私は、伊藤雅之氏、小林奈央子氏に相談して永岡氏の論文を書評する会合を企画した。二〇二一年五月十四日にオンライン上で永岡氏を招き、彼の「宗教」を越えることのジレンマ―大本の軌跡から考える―（「越境する宗教史上巻」リトン、二〇二〇年）を議論の対象とした。本学大学院歴史学専攻に在籍し、現在は東京工業大学大学院博士課程で学んでいる玉置文弥氏にも声をかけて参加をお願いした。

永岡氏にこの論文の執筆動機を話していただいた。第一に、出口なお、王仁三郎が大本だという図式から脱却したいと考えていることが述べられた。それは、王仁三郎の「宗教」を超えるという構想が信者に実践される時にどのような葛藤が生じるのかを見ていくことでもある。永岡氏が「宗教」という用語を使うとき

には内面的な領域に囲まれた宗教概念をさす。それに対して「へ」なしの宗教」は来るべき宗教のありようをさす。このような用語法は、大本が政治、社会運動などあらゆる領域を包含するという王仁三郎の大本のイメージに関わっている。第二に、宗教概念論の射程を広げるため裁判資料を扱って、裁判官、警察、弁護士、信者などがどのような解釈を行ったかを検証する。王仁三郎の思想、大本教事件をめぐる、さまざまな人が解釈を行い、そこでは解釈のせめぎあいがあったし、解釈の連鎖もあったという。

論文では、最初に開教から一九六〇年代の大本の歴史の概略がたどられる。社会的な広がりをもった運動の発展（一九一〇年代、一九二〇〇三〇年代、一九五〇〇六〇年代前半）があり、それに続いて運動の挫折（第一次大本事件、第二次大本事件、平和運動停止）というサイクルがくりかえされた。王仁三郎の「宗教」を超える運動の理念が難問となつて、解釈と実践のずれが深刻なコンフリクトを引き起こした。王仁三郎は、「宗教」大本」がさまざまな領域を包摂し超然すると述べた。第二次大本事件の裁判のなかで「宗教」と「政治」がどのように解釈されたかが取り上げられる。警保局保安課の古賀強は、偽装／実相という二項対立と宗教的次元が政治的次元に転化したという「移写」の論理を使って、王仁三郎が天皇制転覆を意図したと解釈した。子審判事の西川武は、「霊界物語」から皇統を廃する国体変革の意図を読み取る。裁判の中で王仁三郎は、政治的野心

を否定した。大阪控訴院の裁判長の高野綱雄は、王仁三郎に天皇制転覆はなく天皇の下での世界の統一を図ったと述べる。信者で弁護士であった三木喜善らは、判事たちの宗教への無理解が異端という物語の解釈を生み出したと語る。彼らによると、あくまでも王仁三郎は天皇制翼賛であった。終戦に釈放された王仁三郎は、「万教同根」の理念で愛善会を設立し、二代教主の出口すみは、世界連邦運動に参加をし、大本は原水爆禁止運動、平和護憲運動にもかかわらず。出口栄二は平和運動を指揮した。大本の内部分では運動推進派とそれを危惧する人びとの対立が生じ、三代教主の出口直日は、敵を特定せずに心の平和の祈りを説き平和運動から撤退していく。大本の平和運動において「宗教」と「政治」の二分法を越えた試みがなされた。王仁三郎の宗教が「宗教」を越える課題は大本のアイデンティティを解体させかねない危険な問いであったことが指摘される。

この書評会の質疑応答のうち幾つかを紹介しておく。第一に、戦前から戦後へと「宗教」、「政治」は変化し揺れ動いたと思われるが、論文では固定的に描いている。王仁三郎の考えは一貫しているのか、あるいは触れ動いているのか。また本論文の趣旨は、大本の話の次元か、近代日本の宗教の次元か、宗教一般の問題なのか。第二に、末端の信者の姿が見えてこないが、一般の信者は幹部と意見を共有しているのかどうか。第三に、すみ、直日の女性は内面への回帰があって、王仁三郎、栄二の男性が政治運動に向かう

という違いはあったかどうか。第四に、「万教同根」には王仁三郎がいう「超宗教」や「宗教不要の理想」の意味があるのではないか。そこに邪教批判の回避の意図はなかったかどうか。これ以外にも質問が出されて、白熱した議論が展開された。私は、戦前と戦後の制度的な区分がなされていない点を質問したが、永岡氏は解釈史のなかで時期区分ができる可能性もあると回答した。新宗教研究と近代仏教研究の違いにも議論は及び、近代仏教研究には権力論が不在ではないかという疑義が永岡氏から出された。近代仏教研究に関わっている私は、永岡氏の疑義はあたっていと受けとめた。最後に永岡氏からは、民衆宗教史のスピリットを受け継いで権力論にこだわっていきたくないという発言が出された。この発言を聞き、書評会を開催した労は報われた気がした。真剣勝負の質疑応答を通じて多くのことを学ぶことができた。どのような質問にも冷静に答えていただいた永岡氏に深く感謝したい。

現代台湾における宗教文化

林 淑 蕙
林 淳 厚
杉 田 大 和

一、信仰心理の比較—台湾と日本

(一) はじめ

これまでの研究は来日前、私自身の体

験、子供の頃の記憶、帰省時に収集した仏教の寺院や道教の廟観資料などを調べ、一、二編の内容をまとめてきたのだ。まだまだ調べるべきものがたくさんあるが、今回、個々の寺院を調べることより、林淳厚氏と台湾の宗教文化文獻をよみ、異なる側面から近年の台湾宗教文化研究の現状を深く探った。今回は宗教家と政治指導者のあり方、台湾の人々の信仰心理について二、三見解をまとめて述べてみよう。

台湾の宗教を対象にした地域宗教文化Ⅱの授業を任された当時、台湾宗教研究に関連する台湾研究者の書物を思い当らずに見つけられなかった。しかたなく私は、日本人研究者の書物に頼ることになった。今回、中国語で書かれた鄭志明氏著『台湾伝統信仰的宗教詮釈』と英語で書かれたKuo, Cheng-tian氏著『Religion and Democracy in Taiwan』を読んだ。これにより、台湾の宗教文化について異なった側面と見解を知ることになって、台湾の宗教文化を深く再認識し、面白さを感じた。ここでは、「游宗」の信仰心理と信仰形態、「游宗」と現代社会の面から考える。

(二) 「游宗」という信仰心理と信仰形態

一九六〇年以降台湾の新興宗教団体が社会活動を盛んに行い始めた。西洋宗教学者はその活動に注目し研究を開始した。台湾の学者も宗教研究を出した。しかし解釈理論、専門用語などがキリスト教理論、研究方法、用語に依拠するこ

とが多かった。鄭氏はキリスト社会の理論、方法などが中国、台湾の宗教文化を研究することに不適切だと指摘した、彼は中国、台湾の宗教形態、信仰心理を独自に「游宗」という言葉であらわす。

「游宗」は筆者が提起した考え、要求説明華人在其伝統的文化形態的教養下、所発展而成的信仰心理与宗教行為。這是一種文化共相、与華人生活的社会歷史背景是密接相關、在其特殊的生態環境下所形成的驅同理念与対応行為。¹⁾

「游宗」は筆者が提起した考えである。鄭氏の説明によると、「游宗」とは華人の伝統文化に染み込んだ日常生活上の需要により派生した信仰心理と宗教行動である。これは文化と共存をした現象だ。この現象は社会生活背景と密接に関わり、特殊な生活環境で同一理念を求めて生ずる対照行動による結果である。(拙訳)

鄭氏は中国の社会文化と生活習慣などの様相をまとめた結果として宗教の組織と信者の関係から独自に「游宗」という言葉で定義した。中国社会歴史面からの考察によると、戦争や政治交代に直面し、現世利益を求めて宗教に頼るしかなかった民衆がいる。しかし民衆が特定の宗教組織に所属をせず、民衆自身は我が思うままに宗教団体に赴く。つまり、宗教組織は信者に対して縛る制度でもないので、信者が特定の寺院や宗教法人にも属せずに、ある時の需要と目的で、好き

な宗教組織や宗教指導者に自由に行ききることが出来る。このような信仰心理と信仰行為は西洋キリスト教会、教区性、日本の檀家制度と違う。だから、鄭氏はその信仰心理を「游宗」と定義つけた。台湾の宗教信仰状況に幼少期から心身ともに慣れていた私は、大人になっても寺院巡りが好きだ。日本に来て間もない頃、ホームシックな気持ちを和らげるため、日本の寺院にもよく通った。しかし檀家ではないので、寺院に自由に入ることはできず、例え寺院に入っても、お釈迦様の弟子という同一の理念と一体感を味わうことはできなかった。いっそ自分がよそ者だという寂しさを強く感じた。求めても共感できなかったので、また新しい寺院に探し求める。今、私のこの行動こそは典型的な「游宗」だといえるかもしれない、やっと鄭氏の説明に納得した気がする。

(三) 「游宗」と現代社会

Humanistic theology extensively discusses the application of Buddhist principles to family relationships, financial management, health, career development, environmental protection, office relationships, affection and love, and international relations.²⁾

民衆宗教信仰心理の出発点は家族関係、財政管理、健康、出世、環境保護、政治関係、伴侶と恋愛、国際情勢に対する信者の祈願に込めることが目的で

ある。(拙訳)

信者が自分の願いを叶えるため、宗教的な儀礼に参加して、あるいは特定の宗教指導者に帰依する。また、必要とあれば別な宗教団体に参加することもできる。いくつかの宗教団体に所属することもでき、共存することもできる。互いに排他的に衝突することもあまりない。こうしたやり方が、伝統的な信仰に対して台湾の信者がとった信仰形式である。

しかし、近來、新興宗教が西洋教会の制度を導入し、宗教組織を強く固める傾向がある。本来の中国の多元文化共存を単一宗教組織、宗派組織に変えようとした。どのように信者を同一理念で結びつけることができるか。新興宗教はそれを直視している。信者を確保する体制を作り、宗教の組織化を図る。一九八〇年代以降、仏教が台湾で復活してきた。伝統的な宗教団体のほかに新興宗教の社会活動も注目されてきた。特に、仏光山、中台禅寺、法鼓山、慈濟功德会などがある。

この宗教組織化の動きはどのようなもので、どのような影響があるだろうか。鄭氏は宗教の組織化の展開を確立するため、信者と宗教団体が双方間の需要を模索しなければならぬと主張する。

現代社会宗教組織化的発展、没有阻断傳統的「游宗」文化、反而造成信仰系統更為分歧与多樣、形成了各式各樣的宗教運動、導置現代社会的宗教是处在一個不断變遷的動盪之中、能吸收大量的信徒、也可能隨時溜走信徒、在組

織的教派意識下、更要進行宗教內涵的經營、以具体的修行法門与儀式操作、配合精神修煉下的種種靈驗感応、展現其神聖領域的終極境界、同時也要滿足信眾的現世願望、讓教团与信眾能在互取所需的扶持下持久地發展下去。³⁾

現代社会において、宗教団体が組織化の発展により、伝統的な「游宗」文化を遮断する影響がない。その上に宗教系統は細かく分歧し、多様になり、異なる各種の宗教運動を生ず。結果的に、現代社会にある宗教団体は多数の信者が集まる可能性をもちながら、いつも信者が「游宗」で移動するリスクに直面しなければならぬ。この状態を解決するには、宗教団体自身が組織の統合性、経営管理を質的に向上する、宗教修行儀式を普遍化するなどを実行していく体制が必要だ。教団が信者の現世願望要求に満たす努力を求め続ける。この動きにより、教団と信者が win-win という形で共存し、存続し続ける。(拙訳)

子供の頃、親について寺院や廟に参拝するだけだった。大人になっても、深く考えずに気が向くときだけ寺院に入った。親を思うとき、法要をして供養する。受験の時に合格祈願を願う、商売する人は商売繁盛を頼む、それぞれの需要により、神様に願う。日本人が考えているような、寺院に行く人は神社に行かないという持論は理解できなかった。¹⁾曹洞宗だから、浄土宗の寺院に行かな

い」という説にも納得いかない。寺院の神様はどこも一緒という考えが日本には通じないようだ。金持ちになるとか、出世するとかは望まないが、日々の平和な生活を過ごすよう、多くの神様に願えば願うほど叶うのではないかと単純な気持ちで寺院に通う。私の心は、仏様に通じるのだろうか。単純な気持ちで宗教を信じ、宗教の教えを守り、日々の生活試練を誠実に耐えて対応することが宗教を信じる目的だと私は思う。

(四) 結論

いろいろな書物を読んで、台湾の宗教信仰について自分の知識不足を痛感してきた。このまとめにも、多々読み間違いがあると思う。鄭氏の指摘と解釈を読んだ、日本人の宗教における檀家体制に生ずる排他性をすこし理解した。檀家制度という絆で寺を守ることが日本人の信仰心の一つである。また台湾の「游宗」という流動的な信仰形式であるが、同一信仰で台湾人の心を結ぶ共通な「合縁共振」性の本質を認識した。そしてこの両文化の違いを知り、長年私が持ち続けた日本と台湾の宗教文化、宗教活動に対する疑問はすこし解けた気がした。(林淑蕙)

注:

(1) 鄭志明『台湾伝統信仰的宗教詮釋』大元書房、二〇〇五年、二頁

(2) Chen-tian Kuo. 2008. *Religion and Democracy in Taiwan*. Albany: State University of New York Press. p. 16

(3) 鄭志明『台湾伝統信仰的宗教詮釋』一九頁

二、台湾の道教事情と妖怪

陰陽道を専門としていると、陰陽道と道教とはどこが違うのかと聞かれることがある。少し前でも、研究者をなめる人であっても日本の道教遺跡として安倍晴明にかかわる神社を紹介していた。陰陽道研究が進んだ今では、そうしたことはないであろう。陰陽道は道教とは異質なものであるが、陰陽道の思想的源流が中国にあることから、無関係であると断言することも難しい。日本には中国や台湾のように道教の神々を祀つた道観、廟のような建物はない。しかし日本のお札を見ると、道蔵に出ているお札の模様と似たものを見出すことはできる。林淑蕙氏と道教に関する本を読む機会があった。本から学んだことと、林氏に教えていただいたこと、話しあったことをまとめて、台湾の道教についてメモを残しておきたい。

道教は、定義することは難しいようである。台湾には一万余人の道教関係の廟があり、六百万人の信者がいるとも言われる。しかし中国の道教専門家のなかには、台湾にはほんとうの道教はないという人もいるらしい。「道教なき道観」という厳しい見方がされることがある。こうした批判や定義の難しさの根幹には、道教と儒教、仏教、民間信仰との関係が複雑になっていることがある。伝統的な道教とはかくあるべしという見方が

されると、現実のあるものが否定される。伝統的道教では倫理的な価値や精神的修養こそが大事であって、古いや葬儀には関わるべきでないという研究者の見解もある。現実には廟に通つてきている多くの人々は、道教の神々に願いを託し、古いや葬儀を期待している。学者が語る理想と人々の現実にはズレがあることもある。しかし中核には道蔵があつて、いかなる道士もみずからの教義や儀礼は道蔵に由来すると考えていることは事実であるという。

五斗米道の開祖であつた後漢の張陵のころに組織化がおこり、民衆的な反乱になつた。道教が知識人のものから民衆のものへと変化した兆候でもあつた。家族や共同体の規範が、道教の教義や儀礼に統合されて組織が固められた。宋代になると、儒学者や道教の知識人が、道教、儒教、仏教の三教の統合を試みた。明代、清代には、民間信仰の神々の信仰がはやつて、道教の教義や道観に結びつた。道教と仏教を分けることの困難さを象徴しているのは、観音信仰であろう。台湾において観音信仰は仏教であろうか、道教であろうか。もともと観音は仏教であり菩薩であつた。宋代の皇帝の徽宗は、道教と仏教の統合を命じた。それ以来、観音は道教の神となつて、「慈母」「観音老母」「慈航道人」とさまざまな名称をもち崇敬対象になつた。道教の廟で観音を拝む仏教徒は、道教信者にまらげられ、仏教寺院で観音を礼拝する道教信者は仏教徒に勘違いされることは、大いに起こりうることであつた。日本統治時代

には道教の廟が撤去されることになつて、観音を祀つた廟は寺院だと弁明し、総督府支援の仏教会に属するなどして難から逃れた。台北にある人気のパワースポットの指南宮もその一つであつた。面白いことに道教の廟、道観では仏菩薩が祀られることが多いが、仏教寺院では道教の神々が祀られることはない。

道教の神々が台湾に来たのは、明代末であつた。福建省、広東省から移住した人々が道教を持つてきたのであつた。明王朝は、道教の正一教を保護していた。清代初期の鄭成功時代には、清朝の宗教的正統性に挑戦するためにいっそう道教を推進させた。ほとんどの道士は、人々のために悪魔祓い、運命を変えること、

共同体の儀礼をつかさどつた。それらは、正一教の道士の仕事であつた。日本統治時代には、総督府は仏教を奨励して、伝統的な中国宗教を抑圧する政策をとつた。多くの道教の廟は、仏教会に所属をし、神像や儀礼を保持した。一九四九年に正一教の六十三代の管長が、本部を江西省から台湾に移した。台湾において正一教が強固な基盤をもつようになつた。道教、仏教、儒教の信仰はますます統合されて、切り離されることは難しくなつて今にいたつている。

最後に道教の神々とも関係がある妖怪について述べてみる。台湾出身の作家である何敬堯は、台湾に伝わる妖怪を主題とした時代小説を書き、そのために集めた妖怪の資料をまとめ『妖怪臺灣…三百年島嶼奇幻誌・妖鬼神遊巻』(二〇一七年)として出版した。それは、台湾で初

めてとされる台湾妖怪の百科事典となつた。また他にも台湾妖怪ブームの中で活躍するのは、臺北地方異聞工作室と言うスタジオである。そこには、主に十名程度のクリエイターがおり少人数で台湾妖怪関係の書籍やゲームを発表している。台湾の妖怪関係の観光マップや、妖怪を扱つたボードゲームの製作などで活躍している。これら台湾での妖怪ブームは、もとは日本の水木しげるの漫画、宮崎駿のアニメの影響であつた。こういう情報は日本にも伝わり、東京の台湾文化センターでは何をゲストとして呼び、妖怪に関したトークイベントを開くなど妖怪を通じた国際交流がなされている。このような動きは、互いの国に伝わる妖怪文化の情報交換の場ともなるだろう。道教が、妖怪文化にどのような影響を与えたのかどうかを詳しく調べていきたい。(林淳・杉田大和)

注:

- (1) 林淳「総論」『新陰陽道叢書』第五巻、名著出版、二〇二一年
- (2) Kuo, Cheng-tian. 2008. *Religion and Democracy in Taiwan*. Albany, NY: State University of New York Press.
- (3) 『怪と幽 vol. 003』株式会社 KA DOKAWA、二〇一九年



〔編集後記〕

今年度も無事に所報を発刊することができました。人間文化研究所の堀之内さんとあるむ印刷に感謝します。

この編集後記では、「現代人の孤独」について最近考えていることを書きたいと思えます。最近の精神科医療は薬物療法中心主義と認知行動療法中心主義に走っており、かつての精神病理学や精神分析学は軽視されがちです。しかし、私は精神病理学や精神分析学が再評価される日が来る、と予想しています。宮崎駿と並ぶ現代日本を代表するアニメーター・押井守は、現代日本の若者の孤独感について次のような文章を書いています。

自分ではない誰か。目の前について自分を見つめてくれる誰か。

自分がいなくなってもその場に在りつづけ、自分と同じように世界を眺め語り死んでいくであろうそんな「他人」を信じることは、きつとそのまま私たちの生きる世界を信じることであり、それが唯一の「現実」であることを信じることに違いない。

そんな「他人」に会いたい。その出会いの後には、私は決して今の私ではなく、現実（私の現実）ではない唯一のかけがえのない「現実」となつて私の前にひろがるに違いない。

今「希望」や「救い」を語ることは、そんな出会いを通過することなしにはあり得ないのではないかと、そう思えてなりません（押井守『天使のたまご』アニメ

メージュ文庫、一九八五年、一五四―一五五頁）。



「性」の侵入」がますます早期化して、「競争原理を徹底」が若年化している現代、アメリカの精神科医、ハリリー・スタック・サリヴァン（一八九二―一九四九）が人間の成長にとって決定的に重要だとした「前青年期の親友関係」が怪しくなってきたかと思われまふ。

サリヴァンは、薬物療法が存在しなかつた時代に、統合失調症の治療に高い確率（急性期病棟では七〇%近くを社会的寛解させていたともいわれる）で成功していた伝説的精神科医です。サリヴァンは、子どもの「自己中心性」を脱しているが、「性の侵入」はまだである「前青年期の親友関係」に「愛の経験」の原型を見ていました。宮沢賢治の童話「銀河鉄道の夜」におけるジョバンニとカムパ

ネルラの関係を思い浮かべていただいても良いでしょう。

サリヴァンはまた、看護師やソーシャルワーカーの育成にも尽力しました。その際、看護師集団の中で劣等生だった者を意図的に集め、育成しました。そのような環境で育つた人間こそ精神障害の治療に適していると考えたためです。統合失調症の看護においては、前青春期的な、相互の劣等感や不快感とともにする過程が必要であるとサリヴァンは考えたため、病棟は劣等生であった男性看護師のみを集めた場所となりました。

実際、精神科クリニックを訪れる患者の中には、この時期に親友関係がなかった人が多く、そういう人は、三〇歳ごろまで対人恐怖気味になりがちであると言われています（笠原嘉『青年期』中公新書、一九七七年）。

現代日本に、この押井守氏の言葉に惹かれる若者は多いと思います。現代日本では精神病理学は退潮しているので、言及されることは少ないのですが、「前青年期の親友関係」の欠如は、重要な社会問題だと思えます。

（熊田一雄）



〔人事報告〕

一、運営委員の委嘱
新任（英語英米文化学科）
大澤 傑 講師

一、新所員の紹介
日本文化学科 吉田遼人 講師
英語英米文化学科 大澤 傑 講師

一、嘱託研究員の委託

杉田 大和 本学大学院文学研究科
林 淑蕙 本学文学部非常勤講師
大羽 惠美 本学文学部非常勤講師
（以上 二〇二二年四月一日付）

The News Letter of the Institute for Cultural Studies
Aichi Gakuin University
No.47 2021

愛知学院大学

人間文化研究所報

第四七号

令和三年九月二〇日

〒四七〇一〇一九五

愛知県日進市岩崎町

阿良池二二

愛知学院大学文学部内

電話（〇五六一）

七三一―二二二（代）

（内線一八七五）